
俺の天敵

梓川ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の天敵

【Nコード】

N0865I

【作者名】

梓川ルリ

【あらすじ】

俺はバスケバカが集まるバスケ部に所属している。そんな俺には天敵がある。そのせいで俺は、バスケの実力を発揮できないのだ。そんな俺は知らないうちに天敵の秘密に迫っていく！

第一話

1

まず始めに断わっておくが、メイド服について深く論ずる気はない。俺は健全な中二であって、オタクではないのだ。

確かにメイド服は可愛いものだと思う。だが、オタクを見ているとそれほど執着しなくてもいいだろうと思う。

これは俺だけだろうか？ 俺だけではないと信じたい。

「それじゃあ……最後にミニゲームをしようか」

そういえば、今は部活の時間だった。部活終了時刻まで後三十分と少し。

中三の先輩方が引退して一週間たっていない。新バスケット部部長は、部長というプレッシャーと戸惑いでどこか頼りない。そのせいなのか、この数日、部員たちにまとまりはない。

「部長が困ってるぞ。さっさと始めようぜ」

一年の一人が部長に変わり、部員たちをまとめ始める。頼りない部長よりもよっぽど部長に向いている一年の声がきっかけなのだろう。あつという間にミニゲームが始まる。

実を言うと俺はミニゲームをやりたくなかった。なんてったって今日は、第一体育館での練習なんだから。

俺の通っている学校には、体育館が二つある。第一体育館は第二体育館よりも古い。別に、古いからミニゲームをやりたくないって訳じゃない。それは当然だ。

理由は別にある。その理由は、言えない。言ったところで笑われて終わりだろう。

「あーあ……。やりたくねえな」

そんな俺の気持なんか、完全無視。部活の神様は俺に微笑まない。

バスケバカが約九割所属しているのだ。俺そっちのけで思い切りゲームは盛り上がってる。まあ、俺は誰にも自分の気持ちを言っていない。言ったらおそらく半殺しにされるだろう。少なくとも、一発は殴られる。

「川村！」

突如、誰かが俺の名前を叫ぶ。声のほうに体を向けると、敵に囲まれている味方。距離があって誰かは分からない。

俺に向かつて、ボールがパスされる。どうやら部活の神様は、俺に試練を与えるみたいだ。

ああ、最悪。

第一話 二

2

ドリブルしながら、ゴールに向かって進む。こんな時、俺は何も考えてない。ゲームをやりたいくないなんて思考は、明後日のほうに飛んで行ってる。

でも、部活の神様は残酷だ。それを俺は一番よく知ってる。

「川村！ パス！」

俺の周りに敵が集まって来てる。そんな様子を見かねたのか、味方の一人がこつちに合図を送る。冷静に考え、パスをしたほうがいいという結果に落ち着く。ここまでは、良かった。

でも部活の神様はいつものように残酷だった。

ああ、終わったな俺……。

言っておくが、俺は車について論じるつもりはない。いや、でも論じてしまうかもしれない。断っておくが、論じてしまう場合も仕方なく論じるのであり、本心から論じたいとは思っていない。

俺がいるこの空間はもう、第一体育館ではない。他の部員たちの声も、姿もまるで消えてしまったかのようにない。

車になっていた。今現在、俺は人間じゃなくて車だ。それも、結構高級な。

車になっているといっても自分の姿を見て判断したわけではない。感覚的に自分が車になっていると感じてしまうのだ。不思議な話だが。

現実ではありえない設定。第一体育館でミニゲームをするたびに起こる現象。

「危ねえ！」

俺は目の前にある物と現在、凄まじいスピードで走っている自分

自身とを理解し、叫ぶ。いや、正確には叫ぼうとした。つまりは、叫べなかったわけだ。何せ、車だから当然とは言える。残念ながら車に口はない。

いつもと同じ展開。いつもと同じ気持ち。

自分が走る進行方向の先には何かがある。それが人物であるということは車になっても分かる。車になっても人間としての感情や思考は失われならしい。

さらに、人物に近づく。人物の姿を俺は認識する。毎度毎度のことだが、俺は人物の姿に驚く。

メイド服だった。白を基調にした、ひらひらレースがいつぱいついたメイド服。胸元にはどでかい、真っ赤なりボン。

それはただ、放置されているのではない。少女が着ている。

小学校中学年くらいの少女。少女の涙に濡れた瞳が俺を射抜く。

車に心があるかどうかは分からない。おそらくと思うが。だから、この感情は俺のものなのだろう。常人としておそらく正しいであろう感情が、俺を取り巻く。

少女をひきたくない。

第一話 三

3

だが、現実はそのなに甘くない。いや、この他者から見ればかなり異常なこの状態は現実ではないのか？

とりあえずその問題は置いておく。

どんなに頑張ってもスピードは落ちない。というか、スピードを緩めたり、ブレーキを踏むという権限は俺にはないらしい。この世が平等つてのはきつと嘘だ。いや、絶対。

訳分らないことを考え始める俺。見て見ぬ振りしようかと考えたしたが、それを俺はすぐさま否定。

「止まれよっ！　て言うかお前もこっちに気付け！」

意味ないと分かっていながらも口に出さずにはいられない俺の気持ち。空しい。何もできない。

毎度毎度の気持ちに飽き飽きしたいが、出来ない。それよりも俺は、少女をひかないようにするために必死だった。

止まらないなら、進行方向を変えればいい。いつもと同じ考え。いつもと同じように行動してしまう自分。

「絶対ひかねえぞ！」

自分の気持ちを高めるように、声にならない声を口に出す。

俺はハンドルを切ったつもりだ。もしかしたら、スピードを緩められないのと同じように進行方向を変えろという権限は俺にないかもしれないが。

進行方向が変わる。明後日の方向にスピードを多少緩め進む俺。視線の端に少女の姿が一瞬映る。本当に短い間だけだが。

ほっとした瞬間、俺は現実にはほとんど強引に引き戻される。そして俺はいつも通りの展開に頭を抱えることになる。

ゲームは俺が車になっている間も進行している。それはいつもそうだ。

俺も当たり前のようにドリブルをしてゴールにまっしぐらだ。

「やったな！」

俺の進行方向のゴールではなく、背後のゴールのほうで声がする。思い切り弾んだ声。

振り返ることは出来ない。味方の視線が俺に突き刺さっているから。

いつも通りの展開だ。メイド服の少女を何とかひかずに済み、現実には引き戻される。

俺の手にはボールはなく、敵が点を取っている。

今日も結果は変わらない。

第一話 四

4

どうして忘れてたんだ、俺？ 確かに少女をひかなかったのは胸を張って威張れる事実だと思う。でもおそらくだが少女は生きた人間じゃない。幽霊とかそういう類の存在だと俺は思っている。幽霊は車にぶつかっても痛くないよな？

「あー……最悪」

回想していた俺はもうミニゲームが終わっていることを思い出す。

今日の俺の気分は最悪。助けなきゃ良かったって思えない自分も最悪。

世界を怨み始めていた俺の肩を叩いた奴がいる。

「どうした？ みんな帰っちゃったぞ、悟^{わく}」

全くこっちの気持ちに気付いていない俺の親友。デリカシーが足りないのが玉に傷だ。

古典的なスポーツ少年で、勉強は一切できない。補習の常習犯だ。

「……」

「悟、どうした？ そんなに俺に負けたのがショックだったのか？」

こいつは俺の気持ちを一生理解出来ないだろうな……。それを疎ましく思いながら、同時にうらやましくもある。

俺にはないものをこいつは持つてる。確かに成績だけを見れば俺のが断然上だし、運動神経だってそんなに変わらない。

よく分からない。かなり強引で熱血漢で、社会に出たら間違いなく上司ともめ事を起こすであろう親友をうらやましく思うのはなぜなのか。

「そんなことない」

放っておいてもよかったが、それも嫌だから適当に返事を返して

おいた。この時点でかなり間が空いていたが。

んでもって何を勘違いしたのか。こいつは偉そうに俺の肩をさつきよりも激しく叩く。

「そんなことあるだろ？ 今週は俺の勝ち」

「ああ、そうだな。翼、お前の勝ちだ」

正直言っただけはこいつとの勝ち負けに興味はない。第一、そつちからミニゲームの得点で勝負したいと言ってきたのであって俺は何も言っていない。それどころか勝負してもいいとも言っていない。

「だろ？ すげーだろ？」

現在思い切り天狗になってる翼。胸をそらし、褒めてオーラを出してる。

見てるこつちの頭が痛くなる光景だ。

「んなこと言っていないでさっさと帰ろうぜ」

翼への怒りとあきれをメイド服とついでに車にも押しつける。

お前ら幽霊だろ？ 俺をからかって楽しいのか？ ふざけんな！

第二話（前書き）

第二話は川村悟君目線ではありません。
佐々壁葵ちゃんという女の子目線です。

第二話

1

そのメイド服はすごく可愛い。これでもかって位フリルがたくさんついてて。でも全然うっとうしいとは思えないの。胸のところには大きな赤いリボン。

遠くに行っちゃってもう何年も会ってない真里亜まりあちゃんが着たらすごく似合いそう。それ位、可愛い。

「一年、集まってー！」

「はい！」

部活中だった。それを今になって思い出し、回想を中断させ、慌てて部長に駆け寄る。三年の先輩が引退した今、部長も変わった。前から次の部長になるんじゃないかって噂だった先輩。

ちなみにわたしが所属してるのは女子バスケ部。お隣のステージ側のコートでは男子バスケ部が練習している。比較的まとまっている女子と違って男子はざわついてる。きっと部長が変わって少ししか経ってないことが関わってると思う。

「ゲームするよ。チームで別れて」

部長の言葉を合図に全員が二つに分かれる。

ゲーム開始と同時にわたしは駆け出す。ゲームは楽しい。それは勝つても負けてても、得点を入れられても変わらない。

「葵あおい！」

わたしにパスが回ってくる。心の中で嬉しく思いながら、駆ける。それと同時に、数人がわたしの周りに集まってくる。

どうしようか……。一瞬迷い、パス。

が、失敗だった。一応味方にボールは渡ったもののその後わずかな数分でコートの外にボールが出てしまう。

ゲームは一時中断し、女子の視線が男子のゲームに注がれる。か

なり白熱した戦いになっていて、見ているこっちが熱くなる。部長まで見入っているからか、誰もそれをとがめない。

「あ……」

小さく声を漏らす。わたしがひそかに懂れている川村先輩にボールがパスされた。鮮やかなドリブルで敵を抜いていく川村先輩。

「頑張れ……」

「また失敗するんじゃないの、川村君」

手を組み、つぶやいたわたしの声と、部長の声が重なる。思わず視線をそちらに向けるといくつか同意を示す声が上がる。

「かもね。彼よく失敗するし」

自分のことのように悲しくなってきた。遠慮がちに呟き続ける部員たち。その中の約六割が川村先輩に関すること。

川村先輩のスピードが急に上がる。わたし以外の部員たちはざわめきだす。けど、その声がどこか遠くに感じる。いつものあれね。わたしはすぐさま現状を理解する。

目の前には可愛いメイド服が　否、メイド服を着た少女がうずくまっている。

第二話 二

2

初めてこの状態を見た時は、驚いた。普通に驚くだろう。何せ今まで体育館にいたはずなのにいつの間にかどこだか分からない場所にいるのだ。いや、居るというより見えていると言ってもいい。

「危ないよ。車が来ちゃう……」

メイド服を着た少女はわたしの声を聞いても顔を上げない。もしかしたら声が届いていないのかもしれない。

この後の展開は毎回同じ。いつも、いつも……。

「あ……」

明らかにスピード違反であろうスピードでこちらに突っ込んでくる車がある。その車はわたしから見ても高級だつてことが分かる真っ白な車。種類は……分からない。車に関してわたしは興味がないから、種類が分からないのは当然とも言える。

猛スピードでわたしの前を突っ走って行く。早すぎて今回も車の運転手が分からない。

無意味だと分かりながらも、注意するように声をお腹から出す。

お腹から出すと大きな声が出ると、部活中に知ったから。

「危ないですよー」

目の前に繰り広げられる光景はいつもと変わらない。だからわたしにはこの後の展開も大体分かる。

車がメイド服の少女に当たる直前、方向を変えた。それはほとんど無理やりで、車は明後日の方向に走り出す。

ほっとしたのもつかの間。わたしは今までに感じたことのない感覚に襲われた。メイド服の少女に対する違和感。もしかしてあの少女は、幽霊？

自分の思考を疑う。そんなバカなことがあるわけない。第一、わ

たしには靈感とかはない。

「あれ……川村先輩？」

自分の目を疑う。方向を変えた車が塵気楼のようにユラユラ揺れている。それはすぐに消えてしまいそうな印象をこちらに与える。

そんな車と重なるように、川村先輩の姿が見える。もしかして川村先輩は、車の幽霊にとりつかれてる……？

いつものように一瞬にしてわたしの目の前の光景は消え去った。今の今まで聞こえなかった部員たちの声が近くから、はっきり聞こえる。

「あーあ。やっぱり川村君失敗しちゃった」

たかとう
「高遠先輩、カッコいい！」

ちょうど高遠先輩がシートを決めているところだった。鮮やかなシートが決まる。

それと同時に歓声があちこちから上がる。

川村先輩は何とも言えない表情で立ち尽くしているだけだった。

第二話 三

3

「葵、一緒に帰ろう?」

「あ……うん」

部活が終わって十分少々。片づけに手間取っていて、友達を待たせてしまった。申し訳なくて慌てて、机の横にかけられていた学生鞆をひったくるように手にする。

そんな葵を友達は優しく見つめる。雰囲気がどこもなく真里亜ちゃんに似てる。

ちよっぴり悲しくなってきた。そんな気持ちを振り払うようにわたしは声を弾ませる。それは少しわざとらしかったかもしれない。

「待たせちゃってごめんね。行こう?」

そんなわたしに何も突っ込まずに友達はわたしの手をひく。

気を使わせちゃったな……。かなり反省。

優里には何も話してない。というか、親しい人には誰にも言っていないことだけ。優里は薄々気づいてる気がする。わたしが、隠し事をしてるってこと……。

話す必要はないもん。過去のことだし……。自分が逃げていることを自覚し、嫌になる。隠す必要がどこにあるの? 分からない。自分の気持ちが……。

「そうだ、葵」

わたしが回想している間、無言だった優里が不意に思い出したように声をあげた。どうしたのかとマイナス思考になっていた思考を打ち切り、優里を見上げる。

「どうかした?」

「ほら、葵が前わたしに聞いたでしょ? この学校の七不思議」
それで思い出した。いつかは忘れたけど、そんなに最近じゃない

と思う。何となくその時は会話がなくて、そんな話をした気がする。わたしは頭の隅っこから記憶を引っ張り出す。

「この学校に七不思議ってあるのかな？」

そんなわたしの呟きに、隣を歩いていた優里はぴたりと立ち止まる。

怪訝そうにこちらを見てから、何かを考えるように、あるいは思いつくかのように下を向く。わたしは何となくその時の雰囲気で優里の立ち止まった少し先で足を止める。

「あると思うけど……いつの間に七不思議に興味を持ったの？」

優里の疑問ももっともだ。わたしは周りがからかうネタにするほど怖がりだ。もちろん、怖い話の類も苦手。それは七不思議や都市伝説も例外ではない。

「うん、ちよつと……」

絶対にごまかしになってない言葉を言い、それから笑みを作る。

わたしがこの学校の七不思議に興味を持った理由はただ一つ。自分で勝手に幽霊だと決めつけたメイド服の少女だ。否、そのメイド服だ。真里亜ちゃんに似合いそうなメイド服の少女は学校の七不思議の一つなのではないかと考えたためだった。

第二話 四

4

わたしはちよっぴりドキドキしながら優里を期待して見つめる。

そんなわたしを見つめて恥ずかしそうにはにかんだ後、優里は口を開く。

「当たり前だけどあつたわ。七不思議」

そこまでは予想済み。どこの学校にも七不思議はあるって何故かわたしは決めつけているから。

わたしが先を促すより早く、優里は念を押してくる。かなりわたしを心配している顔をしながら。

「七不思議聞いて怖がらないよね？ 何かの罰ゲームとかならやらないでもいいのよ？」

かなり申し訳なくなってきた。そしてそれと同時に自分は好朋友達を持ったなっと思う。本当はメイド服の少女が気になるだけだから怖い。でもそんな気持ちを優里に悟らせまいとわたしは必死に声を弾ませ、笑顔を見せる。

「平気よ。わたしだってもう中学生よ？」

小さく優里は噴き出す。それからゆっくり、思い出しながら語りだす。

「他の学校の七不思議と似たものばかりだったわ。たとえば……」

それからしばらく考えるように間を空けた。どうしたのだろうと思ひ、一つ思い当たる。もしかしたら優里はわたしを怖がらせない話をしようと思ってるのではないのだろうか？

「人体模型が歩いたりとか……ピアノが勝手に鳴ったりとか……」

二つの情景を想像してみる。怖そうだけど、平気。わたしは夜の学校に行ったりしない。それだけは断言できる。たとえ宿題が出来なくて先生に怒られることになると分かってても、わたしは夜の学校

にだけは行かない。だって夜の学校って不気味でしょ？

「メイド服の少女の七不思議ってないの？」

五つ目くらいに差し掛かったところでわたしはじれったくなって、聞いていた。優里は目をぱちくりさせて、心底心配そうな顔になる。
「ないけど……」

きつとメイド服の少女と七不思議が結びつかないんだと思う。それが当然だと思ふ反面、わたしは少しがっかりした。

「どこからメイド服の女の子が出てくるの？」

七不思議って大ウソだとわたしは勝手に決め付け、夜の学校なんて怖くないと認識を改めた。

優里の言葉にはあいまいな笑顔を浮かべるだけで、ごまかす。

「何となく……かな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0865i/>

俺の天敵

2010年10月15日21時03分発行